星槎大学機関リポジトリ

論文種別	追悼特集
タイトル	教育実践研究科長としての大野先生
Title	
著者	西村　哲雄・三輪　建二
Author(s)	
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	*Seisa University Research Studies in Education*
巻	Vol.4
号	No.1
ページ	pp. 46-48
発行日	September 29, 2022
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000293/

追悼特集

教育実践研究科長としての大野先生

西村　哲雄[a]・三輪　建二[b]
（星槎大学大学院教育実践研究科）

1.　教育実践研究科の立ち上げ

2021 年 9 月 8 日（水）教育実践研究科 FD 研修会において、大野先生は「事例研究はまだカリキュラムにはない。この検討は大きな課題です」と述べられていた。また大野（2021）の中で、「教育実践に関する研究（共同研究）があれば、リサーチ・デザインとして、事例研究をリサーチ・メソッドとしてインタビュー（聞き取り調査）を中心としながら、エスノグラフィー／参与観察を実施し、そして結果のまとめとして言説分析を行いたいと現在考えているところです」と述べている。私は大野先生の事例研究を教育実践研究科の主要な位置づけにしたいという並々ならぬ研究意欲を感じている。

大野先生は、設立当初から、専門職大学院である星槎大学大学院教育実践研究科は研究的実践者と実践的研究者の特性を統合した専門職者養成こそ重要であると考え、教育実践研究科立ち上げに尽力してきた。「新研究科設置の目的は、現職学校教員の資質向上を図ること及び専門学校教員の資質向上を図ることにあります」（2016 年 6 月 15 日・面接資料「星槎大学大学院教育実践研究科教育実践専攻（専門職学位課程）」より）。

教育実践研究科とはどのような特色をもった大学院なのか、教育に関する大学院は教育学研究科、教職大学院との違いはどこにあるのか。

平成 28 年 6 月 30 日付文部科学大臣宛「星槎大学大学院教育実践研究科（専門職大学院）設置認可申請に係る補正申請書」の 9 設置の趣旨等記載した書類の 1 設置の趣旨及び教育実践研究科を必要とする理由の中に、「〇学校の現職教員においては…理論と実践の両面を踏まえた教育活動ができるためには、修士課程や博士課程ではなく、理論と実践の往還を目指す専門職大学院であることが重要となる。〇…専門学校や養成機関の教員の資質向上は必須の課題である。…そこで…教育の中核を担う小学校・中学校・高等学校に在職している教員の教育力の向上と、専門学校等の職業人養成機関の教員の養成と資質向上をめざして、インストラクション（教授法）に重点を置いた専門職大学院を立ち上げることとした」とある。

---

[a] 星槎大学大学院教育実践研究科教授・研究科長
[b] 星槎大学大学院教育実践研究科教授

2017（平成 29）年 4 月開設されて設置から 5 年を迎えた 2021 年 12 月 16 日(木)、17 日(金)2 日間、一般社団法人 専門職高等教育質保証機構の訪問調査を受け、2022 年 3 月の認証評価報告書が出された。その中で、本研究科の主な優れた点として、「教育実践に関して、社会人学生が職種や立場を超えて共に学び、議論を深めることにより、狭い職種を超え、教職員とともに洞察力を高められることが、優れています。教職大学院との差別化を図る専門職大学院の意義・目的が、教職員、学生によって明確に認識されている点が優れています」などの評価をいただいた。

大野先生が教育実践を研究するとは何か？ どのようなことか？ など、教育実践研究科の在り方などを FD 研修会で常に共通理解を図ってきたところだ。訪問調査のときも、新しい教育の夜明けという表現で評価をいただいた。きっと大野先生は天国から「そうだろ！だから教育実践研究科は今の方向性で進みなさい！」と、私たちを激励し、温かく見守っているのではないだろうか。

大野先生には、院生たちが日々実践している教育における様々な課題を問いに変え、研究していくという教育実践研究科の進むべき道を私たちに示していただいた。心から感謝申し上げるとともにご冥福をお祈りいたします。　　（西村　哲雄）

2.　教育実践研究とは

大野先生には研究面でも教育面でも大変お世話になった。書き出すと書ききれないほどの思い出があるものの、ここでは 3 つに絞って取りあげてみたい。

大野先生は私が 2018 年に本学の教育実践研究科に赴任する前から、私が監訳者を務めた Schon（1984 三輪（監訳）2007）に注目され、日本教育大学院『教育総合研究』第 5 号に書評を書かれていた。「専門職大学院では、狭い分野をより深く探求する一点限定で他分野では濃度の薄いスペシャリスト（専門性）を育てるのではなく、広い分野にわたり相互関連（ネットワーク知）や構造化等を追究することで（「行為の中の省察 reflection-in-action」）、濃度の濃さにより深さを担保するプロフェッショナル（専門職性）を求めるべきことを、ショーンの本書は示唆している」（大野, 2012）。広い視野を持ち、実践にねざして省察を繰り返す実践者を育てたいという先生の思いは、教育実践研究科の理念に直線的につながっていた。

私はあるとき大野先生に、教育実践研究科の院生の多くがショーンの言う「沼地」で四苦八苦しつつ実践の改善に努力しているが、中には、ある大学院生が、「誇りをもっている現場を沼地とは失礼ではないか」とショーン批判をしたことをお伝えしたことがあった。高校教諭経験のある大野先生は私の語りを静かに聴かれ、一言、「沼地ですか、良い言葉ですね。実践現場は沼地そのものですし、沼地には這い上がるという気概も感じられ

ますね」と述べられた。その表情と、静謐さをたたえながらも毅然とした一言が今でも印象に残っている。実践および実践研究の本質が分かっておられると思ったからである。

2つ目は、大野先生が「書評」の形を借りて、教育実践研究科のあり方を問う姿勢を持っておられたことがある。大野（2021）もそうだった。内容も力作だが、最後の力を振り絞って書かれ、「何とか書き上げました」というメール文を紀要編集者としていただき、涙を抑えることができなかった。

3つ目のエピソードは、大野先生が研究科長として、教育実践研究科の先生方が、多様な背景やそれぞれの専門を生かしながら、ひとつのまとまった教育理念を持って研究指導ができる方向性を探られていたことから、学内共同研究を提案したことである。「教育実践研究とは」をテーマとする2年間の共同研究では、教授会の最後の15～30分を活用して、各教員が自分のめざす「教育実践研究」を物語り、話し合った。また実践研究を専門とする先生方を講師にお呼びして、講演会を開催することもあった。

忌憚のない意見交換は、教授会や講演会の枠を超え、しばしば地下一階の居酒屋での、いわゆる「第二教授会」での談論風発のやりとりへと発展していった。私は失礼ながら、教授会での大野先生より、居酒屋での大野先生の思い出のほうが印象は強い。大野先生は一言、「プラトンの饗宴ですな」とおっしゃりながら、一人ひとりの意見に耳を傾け、端的で、実践的で、でも哲学的な一言を発することがあったからである。

大野先生は、実践を知らないで理論をふりかざす「研究者」には容赦がなかったので、研究者教員である私がいつ、大野先生から批判の矢面にたたされるかと内心不安だった。しかしどういうわけか今まで、表立った批判をいただいたことはなく、「研究者出身なのに実践が分かっていますね」とおほめの言葉を頂戴することがあった。ショーンの翻訳や、実際の院生指導をご覧になっての評価だったのだろうか。「大野先生にほめられる」のは、研究者仲間からのほめ言葉よりもはるかに嬉しいことである。これからも、大野先生からほめられる「実践的研究者」であり続けたいと肝に銘じている。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。　　（三輪　建二）

引用文献

大野 精一（2021）. 教育実践研究とは何か：野村康著『社会科学の考え方－認識論、リサーチデザイン、手法』を手がかりに－ 星槎大学大学院紀要, *3(1)*, 1-8.

大野 精一（2012）. 書評：ドナルド・A. ショーン著、柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的実践とは何か：プロフェッショナルの行為と思考』　教育総合研究（日本教育大学院大学研究紀要） *5*, 93-98.

Schon, D. A.（1984）. *The reflective practitioner: How professionals think in action.* Basic Books. （ショーン, D. A. 三輪建二（監訳）（2007）省察的実践とは何か 鳳書房）